city & life

都市のしくみとくらし

別冊

Let's Greening
緑で生まれ変わるまちとくらし

第29回（2018年度）緑の環境プラン大賞受賞作品集

city&life 別冊

Let's Greening
緑で生まれ変わるまちとくらし

みどりの環境福祉

審査委員会委員長 進士五十八

ウェルフェアとかウェルビーイングとか、福祉は人類最大のテーマだ。福祉を一言でいえば、人々を幸福にすること。

戦後、福祉国家という言葉が多用され児童福祉、老人福祉が叫ばれた。国民の幸せを目指す国づくりであり、弱い側の児童や老人をも幸福にする施策が強く求められてきた。近年マスコミを賑わす国連の呼びかけに始まる「SDGs（エスディジーズ）」は、政府が主導していることもあってか財界人の口にものぼり、経済紙誌の紙面を飾って話題は社会化しているが、目指すところは世界福祉と同じこと。

半世紀ちかく前と思うが、私は『ジュリスト』に「経済福祉から環境福祉へ」というコラムを載せたことがある。老人を特養ホームに入れたり、バスの無料パスを配ったり、お金で老人を幸せに出来るという発想に疑問を感じたからだ。

生きていくためのお金は必要だが、あとは豊かな自然につつまれ、たくさんの仲間たちと、楽しく充実した時間をすごすこともそれはそれでとてもハッピー。そういう「ハッピー・グリーンエコライフ」を提唱しよう。そう考えて私たちはNPO法人「日本園芸福祉普及協会」（2001年）を設立した。

日本人の国民的趣味は、祭りと花だといわれることから「園芸療法」よりも広い「園芸福祉」を標榜したのだ。本誌で紹介される「緑の環境プラン大賞」の受賞者の皆さんの活動内容と、そこでのイキイキぶりを拝見して、これこそ本格的な「園芸福祉」だと実感している。

受賞団体に社会福祉法人や学校が多いこともその証だと思う。読者のみなさまも本誌の頁をめくりながら、日本全国で展開する明るく楽しい「環境福祉」活動のバリエーションを味わい、そして自ら参加してみてください。

しんじ・いそや―― 福井県立大学長／東京農業大学名誉教授・元学長／農学博士（環境学・造園学）

表紙――花の歩話人（ほわっと）ロード西公園（関連記事:p4）
裏表紙――緑とお花と癒しの広場・地域の「どぎゃんね・ガーデン」（関連記事:p5）
photo:坂本政十賜

contents

シンボル・ガーデン部門

国土交通大臣賞	チームおんぺこ	輪島の朝市横蝶～蝶々とあそぶ、みんなの庭をつくろう	石川県輪島市	2
緑化大賞	西公園を遊ぼうプロジェクト	花の歩話人（ほわっと）ロード西公園	宮城県仙台市	4
	社会福祉法人沼山津福祉会 光輪保育園	緑とお花と癒しの広場・地域の「どぎゃんね・ガーデン」	熊本県熊本市	5

ポケット・ガーデン部門

国土交通大臣賞	仙台ナーサリー株式会社 ピースフル保育園	地域の団らん「遊歩道」～フラワー・ピースフル・ロード～	宮城県仙台市	6
コミュニティ大賞	社会福祉法人仙台愛隣会 穀町保育園	こくちょう広場～季節を感じる場所に～	宮城県仙台市	8
	青葉山・八木山フットパスの会	地域の魅力を共有・発信する青葉山フットパーク	宮城県仙台市	9
	社会福祉法人どろんこ会 郡山どろんこ保育園	変革!「保育園森プロジェクト」地域の人と繋がる窓へ	福島県郡山市	10
	社会福祉法人 住吉会 小豆餅ゆすらうめこども園	「自然を身近に! 心も身体も動き出したくなる園庭」整備	静岡県浜松市	11
	ECOKA委員会	花と緑の四季彩まちづくり	奈良県生駒市	12
	特定非営利活動法人 まち・すまいづくり	木の都 上町台地における「ともいきの里庭」整備プラン	大阪府大阪市	13
	社会福祉法人パドマ園	水がせせらぎホタルの棲む高層住宅の中のシンボル緑化計画	兵庫県西宮市	14
	広島市立緑井小学校	モリアオガエルの暮らす水辺の植物ガーデン	広島県広島市	15
	広島市立鈴が峰小学校	雨水利用のリラックスビオトープ	広島県広島市	16
	元気会	ふるさとの山（八面山）回帰プロジェクト	大分県中津市	17

特別企画「おもてなしの庭」

大賞	学校法人東京音楽大学	東京音楽大学 中目黒・代官山キャンパス「みどりの鎌倉街道」	東京都目黒区	18

チームおんぺこ
輪島の朝市横蝶
～蝶々とあそぶ、みんなの庭をつくろう

石川県輪島市

●大町通り沿いのエントランスから望む「朝市横蝶」

人と地域をつなぐ井戸端会議の場に

日本三大朝市の一つ「輪島朝市」。通称・朝市通りと呼ばれる本町通り約360mの商店街には毎朝200以上の露店が並び、輪島観光の目玉として多くの旅行者を集めている。その本町通りから、一筋南にある大町通りまでを南北に縦断する形で細長く開かれた約621㎡の土地に、2019年7月「朝市横蝶」なる緑地公園が誕生した。整備を行ったのは、土地のオーナーを含む市民グループ「チームおんぺこ」。「おんぺこ」とは輪島の方言でウミウシのこと。水中を優雅にたゆたう姿を見習い、焦らず、争わず、ゆっくり活動していこうという思いが込められている。

今回の助成により、大町通りに面したエントランスのパーゴラや花壇、石畳のテラスなどを整備し、広場としての基盤を整えた。さらにメンバーはDIYで石積みをし、円形広場やビオトープ池をつくりあげ、里山のように多彩な自然の再現を目指して、丁寧な植栽を行った。7月のオープン初日にはイベントも開催し、地域の子どもからお年寄りまで、多くの人が集まり、その門出を祝ったという。

輪島朝市は地域の台所であると共に、売り手・買い手が一緒になった井戸端会議の場となり、地域コミュニティを形成してきた。ただ年々、観光の側面が強くなりつつある。そのなかで朝市横蝶は、蝶や鳥が訪れる豊かな自然を通じ、朝市の賑わいを補完しながら人と街をつなぐ、新たな交流拠点になろうとしている。

●DIYで石積みをしたビオトープ池

●地域の人がつくってくれたという看板

●既存の小屋を活用したワークショップスペース

●井戸のある多目的広場

●「横蝶」の名に相応しく、たくさんの蝶が訪れる

●草花の名前を書いたプレートは小学生とのワークショップで作成した

西公園を遊ぼうプロジェクト
花の歩話人（ほわっと）ロード西公園

宮城県仙台市

●針葉樹の小径を明るく彩る水仙

●歩話人ロードを楽しむ人々の姿は絶えない

●水仙の足元には、植栽にあたった子どもたちの名前が記されていた

●各所にベンチも配置されている

気さくな会話が生まれる水仙の小径

仙台市の中心市街地に広がる「西公園」は、明治初期に開園した市内でもっとも古い都市公園だ。広瀬川に隣接し、青葉山を望むこの公園は「杜の都・仙台」の象徴でもある。だが東日本大震災後には整備が行き届かず、訪れる人もなく、寂れた印象になっていた。

そんな状況を改善したいと立ち上がったのが市民有志による「西公園を遊ぼうプロジェクト」だ。代表の関口怜子さんは西公園に近いアトリエで子どもたちのための美術教育の場「ハート＆アート空間BE I（ビーアイ）」を主宰し、西公園の豊かな自然をその題材として活用してきた。そこで仙台市に掛け合い、ボランティアとして除草や樹木の剪定を行うほか、公園の歴史、地形、植生などの勉強会、「俳句を読む会」などのイベントも行ってきた。

そんななか、今回の助成を活用し、樹齢を重ねた針葉樹が影をつくる約250mの小径の両サイドに、約1万本の水仙を植栽。ところどころにベンチをおき、訪れた人がここでひと時を過ごし、行き交う人と気軽に声を掛け合えるような「歩話人（ほわっと）ロード」を誕生させた。植栽にあたっては、地域の小学校にも声をかけ、約150名の子どもたちの協力を得た。水仙の足元には、植えた子どもたちの名札もつけられている。

鮮やかな黄色い花をパッと開き、小径を彩る水仙の花々。それはまるで、東北の長い冬の終わりを告げるファンファーレを奏でるように咲き誇っている。

社会福祉法人沼山津福祉会 光輪保育園
緑とお花と癒しの広場・地域の「どぎゃんね・ガーデン」

熊本県熊本市

右●「ハローの森」にある小屋は、ごっこ遊びに最適
下●ポタージェガーデンを熱心に手入れ

●庭の手入れに訪れた子どもたち。暑いこの日、井戸と水路は大人気

●アーチの向こうは「ハローの森」

「どぎゃんね?」と声を掛け合う地域の庭

2016年4月、震度7を超える地震に2度も見舞われた熊本県。「光輪保育園」のある熊本市東区は、熊本地震でもっとも被害の大きかった益城町に隣接する。10年前に新設した園舎に大きな被害はなかったため、園では2週間ほど、地域の人々約70名を受け入れる避難所として機能したという。

しかし近隣の被害は大きく、地震後は仮設住宅に移る人、住み慣れた土地を離れる人もおり、地域コミュニティは希薄になっていった。そこで光輪保育園では、園舎から少し離れた場所に、園児の菜園用地として取得していた土地を、地域の交流の場として開かれた「庭」にすることを計画。今回の助成に応募した。

面積約205㎡のその庭は、人々が互いに「どぎゃんね?元気ね?」と声を掛け合う場所になるよう願いを込め、「どぎゃんね・ガーデン」と名付けられた。敷地内は、園児たちの菜園「ポタージェガーデン」のほか、リンゴ、ミカン、ビワなど、実のなる木が緑陰をつくる「ハローの森」、色とりどりの草花が咲き誇る「ボーダーガーデン」、地域イベントの場にもなる「ハロー広場」で構成されている。管理・運営は保育園で行うが、庭への立ち入りは原則自由だ。

2019年5月のお披露目パーティーには、近隣住民を含む150名ほどが集まった。庭を育てる子どもたちの元気な姿と、豊かな緑が生き生きと輝くこの場所から、新たな地域コミュニティが育まれていくに違いない。

国土交通大臣賞

仙台ナーサリー株式会社 ピースフル保育園
地域の団らん「遊歩道」
～フラワー・ピースフル・ロード～

宮城県仙台市

●都市的な環境の中に潤いを与える「フラワー・ピースフル・ロード」

子どもたちの笑顔あふれる緑の交流拠点

新築マンションの1階フロア全体を園舎とする「ピースフル保育園」。マンションに入居する保育園としては珍しく、建物の前庭をすべて園庭として利用している。保育室はすべて南側に面し、どの部屋にも暖かな日差しが注ぐ。とくに遊具の置かれていない園庭では、子どもたちが元気に走り回っている。

そのシンプルな園庭には、植栽もほとんどない。じつは今回、ピースフル保育園が助成を活用して緑化を行ったのは園庭のすぐ外側、宮城県が所有する地下に水道管が埋められた工業用水地だ。保育園としてこの土地を活用できないかと県に打診してみたところ「建物さえ建てなければ」と、利用許可がおりた。

蛇行する遊歩道をつくり、その両側にパンジーやデイジー、芝桜などの草花を植えた。ツツジやシャクナゲ、ライラックなど、四季折々に花をつける丈夫な中低木も配され、殺風景だった空間に潤いある緑の景観が誕生した。子どもたちは毎日、この道を通ってお散歩へ行く。水やりなどの手入れも日課の一つだ。遊歩道は地域の人々も利用し、「きれいですねー」「これは何の花ですか?」などと声をかけてくれるようになった。今ではベンチも置かれ、子どもたちと地域の人々との交流が日常的に行われている。

今後、緑のボリュームが増していけば、テーマに掲げた「地域の団らん」が育まれる「フラワー・ピースフル・ロード」としての存在感が増していくはずだ。

●遊歩道に出てきた子どもたちは大喜び

●ライラックは咲いているかな?

●植栽の様子を熱心に観察

●楽しさをダンスで表現

●アリや、小さく芽吹いた花の新芽にも興味津々

●四つ葉のクローバーを見つけて「ピース」

社会福祉法人 仙台愛隣会 穀町保育園
こくちょう広場～季節を感じる場所に～

宮城県仙台市

●これから木々が育ってくれば、ほどよい木陰をつくってくれる

●草花の花びらで色水づくり

●シンボルツリーのドイツトウヒ

●子どもたちの遊び場と植栽がうまくレイアウトされた園庭

●ネームプレートは昨年度の卒園制作

園庭を自然豊かな地域の広場に

キリスト教系の保育園として、およそ70年にわたり地域の子どもたちの育成に務めてきた「穀町（こくちょう）保育園」。10年ほど前、都市計画道路整備に伴い代替地へ移転したが、園庭は狭く、砂地であり、植物が育ちにくい土地であることが悩みの種だった。従来、保育園でつくっていたコンポストを用い、プランターでの草花の栽培や野菜づくりを行ってきたが、保育環境の充実を目指し、園庭の改良を決断。職員らで1年がかりで計画を練っているなか、今回の助成を知り、見事、コミュニティ大賞を受賞した。

園庭は、シラカシ、クヌギ、ツバキなど、実を使っておままごとができる「どんぐり広場」、三輪車の走行に適した道にアーチを配した「わいわい広場」、野菜や草花を植え、四季を感じられる「季節の広場」の3エリアに分けられ、限られた敷地に多彩な環境が生じている。キリスト教系保育園のシンボルツリーとしてドイツトウヒを植樹。クリスマスには子どもたちと一緒にオーナメントを飾りつけた。またクリスマスリースの飾りにしたいと、ヒメリンゴも新たに植樹された。

サクラの木や色とりどりの草花は、園庭の周囲に配置し、外を行き交う人々にも、豊かな自然と季節の移ろいを感じてもらえるよう配慮した。園庭開放時には、近隣の人々が訪れ、緑によって生まれ変わった園庭を楽しんでくれている。子どもたちの明るい笑顔と自然に満たされた園庭は、地域に潤いを与えている。

青葉山・八木山フットパスの会
地域の魅力を共有・発信する青葉山フットパーク

宮城県仙台市

●フィールドワークの休憩所として設置されたフットパーク

●公園に隣接。今後は一体的な活用も予定している

●花壇に植えた草花は、残念ながら雑草に負けてしまったが、今後は広場にも緑を増やしていく

●成長すれば、緑陰をつくってくれるヤマボウシ

地域の魅力を発掘し、発信できる広場へ

仙台市地下鉄東西線の青葉山駅周辺には、東北大学の青葉山キャンパスが広がる。地域の歴史や地勢を学ぼうという大学の活動と、青葉山町内会によるまちづくり活動がつながり、2016年「青葉山・八木山フットパスの会」が発足した。フットパスとはイギリス発祥の「歩くことを楽しむための道」のことだ。

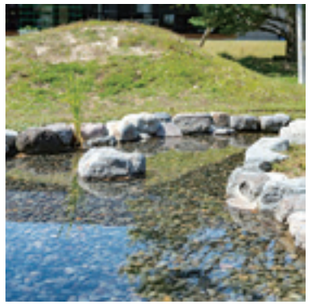
隣接する青葉山・八木山地区の間には、深く切り立った滝の口峡谷があり、従来、一体的な利用が困難だった。この間をフットパスでつなぎ、一帯の魅力的な地域資源を発掘しよう、というのが活動の目的だ。散策を楽しむフィールドワークや、議論の場としてのワークショップをそれぞれ年間3回程度開催。このほか、エリアマップやガイドブックの制作・販売、散策路のサイン設置なども行っている。フィールドワークには、地域の人を中心に毎回30～50名程が集まるという。

今回、助成を活用して緑化したのが、フィールドワークの際の休憩所となる「青葉山フットパーク」だ。ルートの中間点となる場所に未活用の市有地があり、そこを青葉山町内会が借用する形で今回の整備が実現した。パーク内には、ベンチにもなるコンクリート製の築山を数カ所に配し、緑陰となるよう、ヤマボウシを点在させた。周囲に壁や柵はなく、誰もが利用できる地域の広場となることも目指している。今後は各種イベントも開催していく予定だ。一つの「場」ができたことで、活動の幅は大きく広がろうとしている。

社会福祉法人 どろんこ会 郡山どろんこ保育園

変革!「保育園森プロジェクト」地域の人と繋がる窓へ

福島県郡山市



●ビオトープができたことで、よりたくさんの生物が訪れるようになった

●菜園に育つ野菜ものどかな雰囲気を醸し出す

●既成の遊具はないが、子どもたちは想像力で豊かな遊びをつくりだす

●里山のような「森」を目指す園庭

多様な生物が集まる園庭の森

近くに「東北のお伊勢さま」とも称される開成山大神宮や、桜の名所としても知られる開成山公園などを有する閑静な町並みに2018年4月に開園した「郡山どろんこ保育園」。東日本大震災以降、戸外活動が制限され、森や土と離れざるを得なかった子どもたちに「原体験」の場を提供することを目指し、園庭に里山のような「森」を造成した。

今回の助成では、園庭の自然環境をさらに充実させるため、一角にビオトープを設置した。また、食育の一助として、ハーブガーデンを設置すると共にビワ、カキ、ウメなどの実のなる木を新たに植樹。子どもたちの格好のおもちゃになるどんぐりが実るコナラ、クヌギなども植えられた。水辺環境が誕生したこともあり、以来、鳥や蝶などの生き物の姿が、今まで以上にたくさんみられるようになったという。

広々とした園庭には、主だった遊具はない。築山や傾斜地など、ほどよく起伏のある地面には芝生が敷きつめられ、子どもたちが存分に走り回り、転げ回ることもできる。また、園ではその名が示す通り、毎年夏に子どもたちがどろんこになって遊ぶ「どろんこ祭り」が開催されている。このお祭りは、保護者や地域の人々と一緒に企画・運営されるもので、この時、緑豊かな園庭は、地域のお年寄りから子どもまでが集い楽しむ会場となる。今後はそれ以外にも、自然を通じて、地域とより密接に交流していく予定だ。

社会福祉法人 住吉会 小豆餅ゆすらうめこども園

「自然を身近に! 心も身体も動き出したくなる園庭」整備

静岡県浜松市

●めだかを発見。子どもたちは興味津々

●今はまだ骨組みだけだが、来年にはモッコウバラのトンネルになるはずだ

●男の子も女の子も木登りが大好き

●今回の助成で購入した砂場の上のパーゴラ。今後トケイソウを這わせる計画だ

●水遊び場は、ビオトープとつながっている（小豆餅ゆすらうめこども園提供）

園庭が地域の「心のふるさと」になるように

小豆餅ゆすらうめこども園は、自然環境が乏しい商業地域に立地している。せめて「心のふるさと」になるような庭になればと、コミュニティ大賞の助成金を使い、園庭整備に踏み切った。木がしげり、草花が生え、昆虫たちが集まってくるような、そんな自然が溢れる園庭にしたい。園児や保護者たちも一緒になって、つくりあげている庭だ。

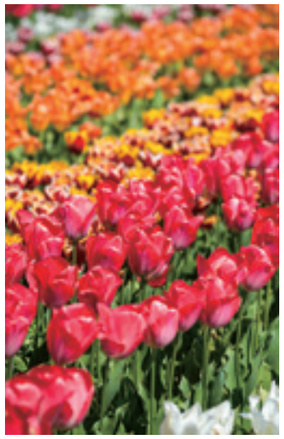
「もともと真っ平らな土地で、園児の成長を考えると、足腰を鍛えるためには、もう少し起伏がある方がいいと、築山をつくりました」と理事長・園長の増谷昌子さんは言う。築山を駆け足で上り下りする園児たちに混じって、尻もちをつく園児もいたが、そういう体験こそ大事なこと。ここには遊具は置いてない。自然のなかで思いっきり遊んで欲しいという職員みんなの思いからだ。

砂場には、パーゴラがつくられた。園児たちを日差しから守るためトケイソウ（パッションフルーツ）を植えてある。同様に、今回の整備計画のもう一つの目玉モッコウバラのトンネルも含めて、どちらもその成長を見守っているところだ。「トンネルは、くぐるだけではなく、大人の目を逃れて隠れる気分を味わえる秘密の場所にもなるはず」と増谷さん。

園庭にはビオトープがつくられたが、水遊びのできる池と分けていない。できるだけ自然に近い状態にしたいという考えがここにも生かされている。

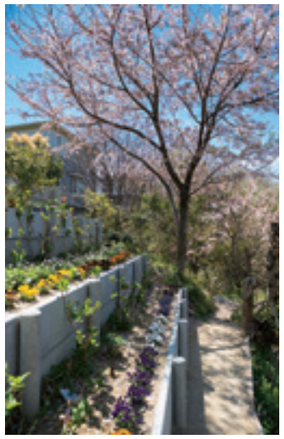
ECOKA委員会
花と緑の四季彩まちづくり
奈良県生駒市

●土砂の流出予防を目的に設けられた土留め用のブロック。整然と並ぶ白い柵も美しい


●色とりどりのチューリップはオランダからの輸入品

●5000株以上のチューリップが咲き誇る。サクラ、ハナモモとの同時開花は非常に珍しいとか

●回遊性に配慮した木製の階段は、鉄道の枕木を使用した


●里山の風景と調和する花壇づくりは見事というほかない

住民が育てる5000株を超すチューリップ

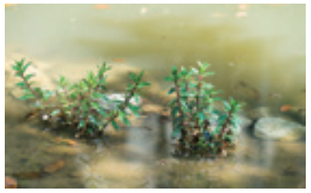
2019年4月、約5000株のチューリップが見頃を迎えた。奈良県生駒市鹿ノ台地区の住宅地の一角で、花壇づくりが始まったのは7年前。花を育てたのは、鹿ノ台地区で行政と協働でさまざまな緑の保全・育成活動を実施してきたECOKA委員会。2008年の発足以来、鹿ノ台住宅地周辺12ha以上の緑地を整備し、1200本を超える植樹活動や雑草木の間伐・下草刈りなどの維持管理や不法投棄ゴミの回収などの美化活動を継続的に行ってきた。

また、地区内の未利用地（宅地）の一部を所有者の協力で、生産緑地へ地目変更し、この未利用地を地元住民の憩いの場、名付けて「鹿ノ台オープンガーデン」として開放し、四季折々の花を植えて季節感の演出に努めている。今回、助成を利用してこの「鹿ノ台オープンガーデン」の補修・整備を実施した。

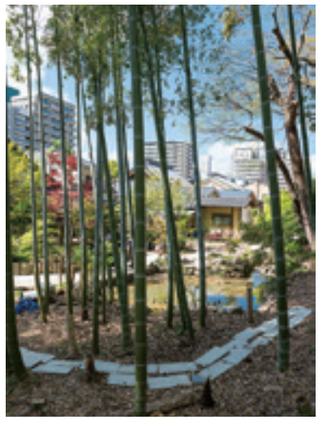
「さすがに7年も経つといたみも出てきて、とくに花壇は、土砂がアスファルト舗装の街区道路に流れ落ち、著しく美観を損ねていました。そこで、土留めをしっかりやって、土砂の流失予防を図り、また、斜面緑地の特性を活かして花壇を増設、階段を再整備し、回遊路として再生しました」と言うのは、ECOKA委員会委員長の山田勲さん。

「花壇はチューリップが終わるとジャーマンアイリス、ユリ、アジサイと続きます。いつも何かが咲いている庭にしたいですね」。山田さんの夢は尽きない。

特定非営利活動法人 まち・すまいづくり
木の都 上町台地における「ともいきの里庭」整備プラン
大阪府大阪市


●オオアブノメなどの抽水植物が水面から顔をのぞかせている。水が澄んでいる証拠だ

●湧水が涸れていたが、ビオトープを創設。水道水を循環させている


●池を取り囲むように、竹林が形成されている

●地域住民が気軽に立ち寄れて自然を楽しめる緑のネットワーク拠点を目指す

●西側崖部に斜面緑地が広がる上町台地は、自然資源の宝庫だ

斜面緑地と一体化させた庭の整備と涸池の再生

「上町台地」は、大阪平野の中心部に位置し、北は現在の大阪城から、南は住吉大社まで続く全長9kmの洪積台地だ。

上町台地の西側崖部には、南北約1.5kmの「斜面緑地」が続き、その一部（生國魂神社～四天王寺～一心寺）には、原生林を思わせる林が存在するが、市民にはあまり知られていない。またこの界隈は、日本有数の寺町で、江戸時代に集められた寺院が今も軒を連ねている。かつては豊かな湧水でも有名であった。

その寺院の一つ、淨國寺（じょうこくじ）は、斜面緑地と隣接する境内地の奥に池がある。地下鉄工事や泥の堆積の影響で、かつて水を蓄えていた池は涸れ、訪れる参拝者の目が届かない空間になっていた。

そんな折、上町台地の地域情報紙を発行するNPO法人まち・すまいづくりが、同地域の魅力を発信するオープン台地実行委員会と協働で、「ふれあいの庭」として、この場所の整備を提案した。

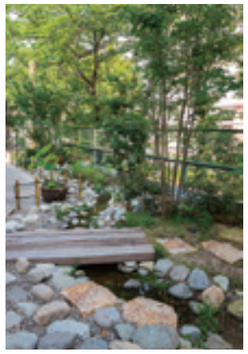
新たにビオトープを創設し、水生生物を放ち、スイレンなどの浮葉性植物やコガマなどの抽水性植物を置いた。

何より、ここには緑の拠点となる斜面緑地がある。周辺には、幼稚園、保育園、小学があり、多くの子どもが集まる場所でもある。

都心にありながら生物多様性の重要さを学ぶいい場所になるだろう。ビオトープを中心とする新たな木と水のネットワーク拠点に期待したい。

社会福祉法人パドマ園
水がせせらぎホタルの棲む高層住宅の中のシンボル緑化計画

兵庫県西宮市



左●枕木の桟橋がかかるせせらぎには野草の植栽
右●石積みの奥には、木々と草むらに覆われたホタルの生息ゾーンがつくられた

●せせらぎやビオトープに植えられた植物には、すべて名札がかけられている

●湧き水がせせらぎを通りビオトープへ。水が流れるイメージを演出

●湧水をイメージした石造の鉢で池の水を循環させている

雑木林とビオトープは、子どもたちの学びの場

武庫川団地内にある幼保連携型こども園「パドマ・ナーサリースクール」は、築26年目を迎えた2019年、園児や地域住民が自然に親しめる環境づくりを目的に、園庭のリニューアルを実施した。武庫川団地も約35年が経過し、成熟した緑はあるものの、自然を積極的に活用できる場所は少なく、また、水辺空間は、周辺地域も含めて皆無だった。

今回助成を受けて、水辺を中心に、自然のなかに多くの生物が生息できる環境づくりを目指し、雑木林、せせらぎ、ビオトープを総合的に整備した。

水のせせらぎは、子どもたちが自然を体感できるように、虫探しや水遊びが楽しめる空間に、またビオトープは、生物や水生植物が生息できる静かな水辺空間とした。雑木林は、周辺緑地とのつながりを意識し、関西の郷土種をベースに樹種を選択。生物多様性保全にも寄与できたと自負している。

「ビオトープにはホタルもいるんですよ」と言うのは、同スクールの園長・赤井秀顕さん。「ホタル鑑賞の夕べをやり、大盛況でした。今後も、地域コミュニティで楽しめるイベントを続けたい」と。

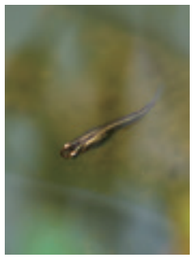
現在、園庭の片隅に上下水が使用不能になっても使える循環式水洗トイレを計画中だ。阪神・淡路大震災の経験から、トイレの重要性に気付かされたからだという。「景観上の美観も大事ですが、社会福祉法人として地域住民への貢献も大切」と赤井さんは言葉を結んだ。

広島市立緑井小学校
モリアオガエルの暮らす水辺の植物ガーデン

広島県広島市

●ビオトープの背後には、モリアオガエルが生息する裏山がある

●中低木がビオトープを囲むように配置されている



●メダカの元気よく泳ぐ姿が見られる

●コガマやマツモなどの水生植物が水底にたゆたうのが確認できる

●モリアオガエルの繁殖と生態が観察できるのは来年か

子どもたちの自然を愛する心情を育む

緑井小学校では、数年前からモリアオガエルの生息が確認されていた。同校プールにおいてモリアオガエルの成体や産み付けられた卵が見つかったからだ。

モリアオガエルは、広島県指定の天然記念物。とくに繁殖において際立った特徴をもつ。カエルは水中に産卵するものがほとんどだが、モリアオガエルは、粘液で泡立てた卵塊を、水面上にせり出した木の枝や岸辺の草などに付着させるようにして産む。

モリアオガエルの繁殖と、その生態を気軽に観察できる場所ができないものか。同校には、観察池がないことから、水辺を中心とするポケット・ガーデンが企画され、今回コミュニティ大賞の助成を受けて実現した。

ポケット・ガーデンは、中央のビオトープを囲むように中低木が配され、周辺の林とゆるやかにつながっている。もとは低学年用の畑だったが、理科教室に隣接し、生きものの観察や維持管理に適しているという理由からこの場所が選ばれたという。

学校施設内ではあるが、学校行事や参観、児童館や町内会の行事で来校者は多い。また、放課後や休日は校庭及び体育館を多くの団体に開放しているため、利用者の訪問も多い。近年開発が進む地域ではあるが、貴重な自然を観察できる場所として地域の期待は大きい。今後は、モリアオガエルだけではなく、水生昆虫や地域周辺に生息する水生生物も飼育できるようにしたいと考えている。

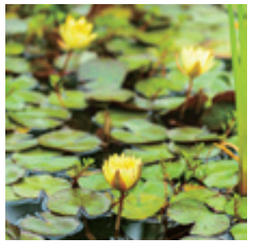
※第28回（2017年）にて受賞

広島市鈴が峰小学校
雨水利用のリラックスビオトープ
広島県広島市

●グランドと明確に分けられたビオトープ。季節や自然をからだで感じられる空間だ

●自慢のビオトープのそばには、手づくりの「リラックステラス」が

●ビオトープに生息するさまざまな生きものに、子どもたちの目が輝く



●ビオトープには、スイレンがよく似合う

休憩時間も児童で賑わう大の人気スポット

鈴が峰小学校にビオトープが誕生したのは今から15年前。企業の協賛を得て、児童、保護者、地域の人々が協力しあってつくりあげた。しかし、児童や地域の人々の人気スポットも、経年変化に伴い、保護シートの破損や藻の繁殖による陸地化が進行。また、設置しているベンチが腐食したりビオトープとグランドの境界があいまいになるなど、修繕・改修の必要性が生じていた。

今回、コミュニティ大賞の助成を得て、修繕・改修に踏み切った。リラックステラスの改修とビオトープとグランドの境界を明確にし、雨水を利用してビオトープに水を引き入れる仕組みの導入だ。

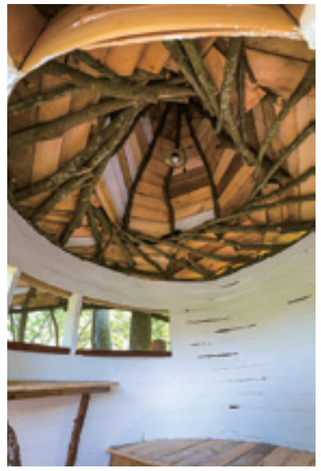
「ビオトープのとなりに未使用の小プールがあるのですが、そこに溜まった雨水を、ビオトープや散水に利用しようというアイデア。これで水道水を使わずに、自然の水が使えるねってみんなで喜んでいたんですよ」と教頭の粟村美苗さんは言う。

ビオトープは、メダカをはじめとする水生動物たちの宝庫だ。授業中以外にも水生動物や昆虫、植物を観察しに児童はビオトープに集まってくる。最近は、野鳥もくるようになったという。「毎年有志が環境整備を手伝ってくれます。ビオトープが大切な場所と思ってくれているからでしょう」

手づくりで始まった子どもたちや地域の方々をつなぐビオトープは、「今後も守っていきたい本校の大事な宝物です」と粟村さんは微笑む。

元気会
ふるさとの山（八面山）回帰プロジェクト
大分県中津市

●四季の丘公園の入り口に新設されたホビットハウス



●自然の枝を使った伝統的な工法を用い、頑丈につくられている

●小屋の足元を彩るユキノシタやハワサビなどの草花

●以前つくられた小屋の草屋根はすっかり自然と同化している

草屋根に野草が揺れる小人の村

大分県中津市のシンボルといわれる「八面山」。標高約659mのこの山は、四方八方から眺めてもほぼ同じ形に見えることからその名がついたとされている。中津市民にとっては、仰ぎ見れば、いつもそこにあるという安心感をもたらす、心の拠り所だ。

そんな八面山の中腹、八面山荘と隣接する一角に、「四季の丘公園」がある。以前から、八面山の魅力をいっそう高めるために公園の整備が行われていたが、入口付近が周囲の自然に馴染みすぎているためか、訪れる人が少なかった。そこで今回、中津市で活動するまちづくりグループ「元気会」では、人々により八面山に関心をもってもらい、子どもたちにも親しみをもってもらおうと、助成を活用し、草屋根の小さな家「ホビットハウス」を2棟新設。その周囲にユキノシタやツワブキ、サギゴケなど、在来種による花壇を造成した。施工にあたっては、ワークショップを開催し、子どもたちにも参加してもらったという。

じつは元気会ではこれまでにも、四季の丘公園の所々に、同様の小屋をつくり続けてきた。時間が経つと、草屋根の上にはさまざまな植物が根付き、花を咲かせ、いつしか自然と同化していく。小人サイズの小さな家だが、子どもたちにとっては、自分のために誂えられたかのように、愛着を持てる空間だ。八面山・四季の丘公園は、子どもたちが自分なりの物語を紡ぐことができる、人気スポットとなりつつある。

※第28回（2017年）にて本賞を受賞

学校法人東京音楽大学
東京音楽大学 中目黒・代官山キャンパス「みどりの鎌倉街道」

東京都目黒区

●中目黒側からみどりの鎌倉街道と建物を望む

まちとまちを結ぶ緑と音楽にあふれたみち

東京音楽大学は、「まちと協奏するみどりの中の音楽大学」をテーマに、旧鎌倉街道（目切坂）と武蔵野の森を再生する新キャンパス建設プロジェクトを実施した。開校にあたり、キャンパス内に「みどりの鎌倉街道」と貫通通路「音楽の道」を建設し、新たな回遊性を形成。学生だけではなく、地域住民にも自然と触れ会える環境をつくり出した。

今回の「おもてなしの庭」対象部分は、みどりの鎌倉街道を中心に中目黒と代官山を結ぶ、キャンパス内の歩行者空間「みどりの鎌倉街道」。最大で約10mの高低差があるのが特徴だ。旧鎌倉街道は、食を運ぶ重要な生活道路であったが、近年は、通称暗闇坂とも呼ばれ、人の往来が十分ではなかった場所だった。

プロジェクトでは、旧鎌倉街道をみどりの鎌倉街道として再生するため、周辺の保存種を残したうえで、関東平野に多くあった木々を新植し、さらに水景を創設。武蔵野の風景の記憶を継承すべく「武蔵野の森」を再生した。

「人格そのものが音に表れるのが音楽の特徴。心に余裕がなければいい音は出ません。そういう余裕をつくり出すには、緑の環境は非常に重要。ここは緑に溶け込むキャンパスだと言っているんですよ」と理事長・鈴木勝利さんは言う。

開校後、みどりの鎌倉街道を往来する人が、以前より多く見られるようになった。地域に開かれた、のどかで緑豊かな憩いの場が本領を発揮するのはこれからだ。

●地域住民も自由に利用できるみどりの鎌倉街道は、24時間往来可能だ

●保存樹と新植樹がバランスよく混在している

●みどりの鎌倉街道は、近隣住民にとって格好の散歩コースになっている

●ガラスの写り込みが緑の空間を輻輳化する

●代官山側から学生カフェの入り口付近を眺める

●みどりの鎌倉街道の中腹あたりに設けられた水景

●低木層と草本層で構成された水景の植栽

募集の対象

シンボル・ガーデン部門	全国を対象	地域のシンボル的な緑地として、緑のもつヒートアイランド緩和効果、生物多様性保全効果などを取り入れることにより、人と自然が共生する都市環境の形成及び地域コミュニティの活性化に寄与するアイデアを盛り込んだ緑地のプランを募集します。
ポケット・ガーデン部門	全国を対象	日常的な花や緑の活動を通して、地域コミュニティの活性化や保育園・幼稚園、学校、福祉施設などでの情操教育、身近な環境の改善に寄与するアイデアを盛り込んだ花や緑のプランを募集します。
特別企画 「おもてなしの庭」	東京都限定	2020年に向けた特別企画として、花と緑で観光客をお迎えする魅力ある緑の創出、及びその場所でのおもてなしの活動に関するアイデアを盛り込んだプランを東京都内限定で募集します。

表彰

シンボル・ガーデン部門	国土交通大臣賞	1点以内	副賞800万円以内（助成金）
	緑化大賞	2点以内	副賞800万円以内（助成金）
ポケット・ガーデン部門	国土交通大臣賞	1点以内	副賞100万円以内（助成金）
	コミュニティ大賞	9点以内	副賞100万円以内（助成金）
特別企画「おもてなしの庭」	大賞	1点程度	副賞2,020万円以内（助成金）

審査委員

委員長	進士五十八（福井県立大学学長／東京農業大学名誉教授）
委員	青木由行（国土交通省都市局長） 金子忠一（東京農業大学教授） 永山妙子（マネジメントコンサルタント） 藤沢久美（シンクタンク・ソフィアバンク代表） 松本肇（株式会社産業経済新聞社取締役営業・事業担当） 村上暁信（筑波大学システム情報系教授） 稲垣精二（第一生命保険株式会社代表取締役社長） 小野文夫（一般財団法人第一生命財団常務理事） 宮下和正（公益財団法人都市緑化機構専務理事）

※役職は2018年審査会当時

スケジュール

募集期間	2018年4月1日～6月30日
審査会	2018年9月26日
入選発表	2018年10月12日
表彰式	2018年11月19日 於:明治記念館

主催等

主催	公益財団法人都市緑化機構、一般財団法人第一生命財団
後援	国土交通省、環境省、全国知事会、全国市長会、全国町村会、東京都（おもてなしの庭）
特別協賛	第一生命保険株式会社
協賛	一般社団法人建設広報協会、一般社団法人日本公園緑地協会、一般社団法人日本造園建設業協会、 都市緑化基金等連絡協議会
協力	株式会社フジテレビジョン、株式会社産業経済新聞社、株式会社ニッポン放送

city&life 別冊

2020年3月5日発行

発行者	一般財団法人 第一生命財団 東京都千代田区平河町1丁目2番10号平河町第一生命ビル2階 電話03-3239-2312
編集協力	株式会社 アルシーヴ社 斎藤夕子
撮影	坂本政十賜
デザイン・レイアウト	生沼伸子
印刷	株式会社 エイチケイグラフィックス

ISSN 0289-7172
一般財団法人 第一生命財団

city&life 別冊